



書 7 0、陶器 2 0 0 0 親子三人の家庭美術館

ご主人の井出正仁さんは、東京都立水元養護学校の元校長先生。自閉症児の研究者で著書もある。奥さんの一枝さんは、葛飾区の公立小学校の元校長先生。絢翠という号をお持ちで書道の先生。よみうり・日本テレビ文化センター柏で、「巻紙で書を楽しむ」の講師をされている。電話連絡し、都合をお聞きすれば観賞できる。04-7167-7802



道路から入ると別世界。吾唯足知の蹲（つくばい）に水がそそぎ、反対側には写真のように、三疊台目の茶室と陶芸窯の別棟がある

誇張した言い方に白髪三千丈というのがあるが、「陶器二千」というのは、誇張ではない。一階から二階まで、五つの展示室があり、そこをぎつしりと茶器や花器が埋め尽くしているのである。ひよつとよるけたらたいへんである。緊張せざるをえない。壁面を、これも隙間なく掛けられているのは楷書・草書・行書、そしてかな文字の書である。書は等身大の屏風であったり、額に飾られている。さらに日本画が色を添えている。

柏市泉町の井出正仁・一枝夫妻

陶器は、ご主人正仁さんの手作り、それも轆轤（ろくろ）を使わずに土練りをして仕上げ、底の糸切の部分にくつつける。すべて独学で習得された。左上の茶器は平成十一年に信楽赤土を使って作られ、底に「親の涙」と書かれている。指で押した凹みから、釉薬が流れ、涙を流したように見える。茶器、花器、酒器が並ぶ。花器には日本画家の娘さん高木仁枝さんの絵が描かれている。また、書き込まれている文字は、書家で長年にわたって書道の教育に携わってきた奥さんの一枝さん（号は絢翠）の筆による。

陶器の輝きを引き立てるように、書の力強さ、優しさが立ち込めるようである。「書は日本文化の伝統を引き継いでいる。書を教え伝えていくことが私の使命だと思っています」という思いが伝わってくる。

つくばいを配し、茶室と陶芸釜を備えたたたずまいを、樹齢百年余のヤブツバキが見下ろしている。わびさびの異界に思えてくる。



末広クラブ・逆井漫步58 平成15年5月